

セルゲイ・プロコフィエフ(1891年4月23日 - 1953年3月5日)

20世紀ロシアの最も重要な作曲家の一人であり、ピアニスト、指揮者としても高い評価を受けました。彼は、古典的な形式と斬新なリズム、独自の和声語法を融合させ、現代音楽の世界で大きな足跡を残しました。以下は、プロコフィエフの生涯、作品、特にピアノ曲、人間関係、思想について詳しく解説します。

生涯

幼少期と音楽の開始 プロコフィエフはロシア帝国のソンツォフカ村で生まれました。非常に早熟で、5歳でピアノを弾き始め、作曲も幼少期から始めました。9歳までに彼はすでにいくつかのオペラを試作し、1904年にはサンクトペテルブルク音楽院に入学しました。音楽院で彼はリムスキー＝ニコルサコフやリャードフ、アンナ・エシポワといった重要な教師の指導を受け、才能を発展させていきました。

初期キャリアと国際的成功 1910年代に入ると、彼は大胆で型破りな作風を確立し、「風刺」「スキタイ組曲」「古典交響曲」などの初期の重要な作品を発表しました。プロコフィエフは演奏家としても優れており、自作を積極的にピアノで演奏し、国際的な評判を得ました。1918年、ロシア革命が勃発すると、プロコフィエフは一時的にアメリカとヨーロッパに移住し、そこで重要な作品を発表しながら作曲活動を続けました。

ソ連帰国と晩年 1936年、プロコフィエフはソビエト連邦に帰国し、その後のキャリアの大部分をソ連で過ごすこととなります。この時期、彼の音楽は社会主義リアリズムの枠組みに適応し、より伝統的でメロディアスなスタイルが強調されました。しかし、政治的圧力の中での生活は困難であり、特に1948年にはジダーノフ批判の対象となり、彼の音楽が「形式主義」として非難されました。1953年、彼はスターリンと同じ日に亡くなり、その死はしばらくの間ほとんど注目されませんでした。

作品とピアノ曲

プロコフィエフの作品は非常に多様で、交響曲、バレエ、オペラ、映画音楽、室内楽、そしてピアノ作品が含まれます。特に彼のピアノ作品は、技巧的でありながらも独自のリズムと大胆な和声を持ち、多くのピアニストにとって挑戦的なレパートリーとなっています。

ピアノソナタセルゲイ・プロコフィエフのピアノソナタは、20世紀ピアノ音楽の重要な

レパートリーの一つであり、作曲家としての彼の進化や時代背景が反映された作品群です。プロコフィエフは、生涯で9曲のピアノソナタを作曲しており、それぞれが異なるスタイルと音楽的なアプローチを示しています。

1. ピアノソナタ第1番 へ短調 Op.1(1907-1909年)

プロコフィエフがまだ若い頃、サンクトペテルブルク音楽院の学生時代に書いた最初のピアノソナタです。この作品は、プロコフィエフの初期の才能を示しており、明確な形式と力強い表現を持っています。古典的なソナタ形式に基づいていますが、和声やリズムに独自の斬新な工夫が施されています。短いながらも、劇的でエネルギッシュな作品です。

2. ピアノソナタ第2番 ニ短調 Op.14(1912年)

第2番のソナタは、第1番に比べて成熟した作品であり、プロコフィエフの特徴的なリズム感や鋭い和声感がより明確に現れています。4楽章構成で、特に第1楽章の力強い主題や、第4楽章の軽快でリズムカルなフィナーレが際立っています。この作品は、プロコフィエフが「個性を確立し始めた時期の作品」として重要です。

3. ピアノソナタ第3番 イ短調 Op.28「古いノートから」(1917年)

第3番のソナタは、彼が若い頃に書いたスケッチを元に完成させたもので、単一楽章でありながら非常に劇的な作品です。勢いのあるリズムと、激しい感情の起伏が特徴的で、プロコフィエフの「初期の爆発的なエネルギー」を体現しています。この作品は短いながらも、非常に強烈な印象を与えます。

4. ピアノソナタ第4番 ハ短調 Op.29「古いノートから」(1917年)

第4番も第3番同様、若い頃のスケッチを元にした作品です。3楽章構成で、全体的に抑制された抒情的な雰囲気が漂っています。特に第2楽章の叙情的な部分と、第3楽章の優雅さが際立っており、プロコフィエフの音楽の中でもより内省的な一面を見せています。この作品は、内向的で深い感情表現が特徴です。

5. ピアノソナタ第 5 番 ハ長調 Op.38/135(1923 年、1953 年改訂)

プロコフィエフがパリ滞在中に作曲したソナタであり、よりフランス的な洗練された響きが特徴です。この作品は、プロコフィエフの他のソナタに比べるとより軽やかで明快な雰囲気を持っていますが、和声的には複雑で、しばしば驚きの要素が含まれています。1953 年に大幅な改訂が行われたため、初期版と改訂版の両方が存在します。

6. ピアノソナタ第 6 番 イ長調 Op.82(1939-1940 年)

第 6 番は、プロコフィエフの「戦争ソナタ」の最初の作品として知られています。このソナタは、第二次世界大戦の不安定な時代背景を反映しており、劇的で暴力的な表現が特徴です。特に第 1 楽章の強烈なリズムや、第 4 楽章の息をのむような急速なパッセージが有名です。プロコフィエフはこの作品で、戦争による混乱や激しい感情をピアノで表現しています。

7. ピアノソナタ第 7 番 変ロ長調 Op.83(1942 年)

第 7 番も「戦争ソナタ」の一つであり、最も人気のあるソナタの一つです。3 楽章構成で、非常に激しく緊張感のある音楽が展開されます。特に第 3 楽章の「プレチピタート」は、圧倒的な速度とパワーを誇り、ピアノ技術的にも高度な作品です。この楽章は、プロコフィエフのピアノソナタの中でも最も有名で、演奏会でも頻繁に取り上げられます。

8. ピアノソナタ第 8 番 変ロ長調 Op.84(1944 年)

第 8 番も戦争時代に作曲された「戦争ソナタ」の一つです。このソナタは、他の 2 つの戦争ソナタに比べるとより内省的で、抒情的な側面が強調されています。3 楽章構成であり、特に第 2 楽章の夢幻的な美しさが印象的です。この作品は、プロコフィエフの成熟した感情表現を示すものであり、戦争による悲劇と人間の内面の葛藤が織り交ぜられています。

9. ピアノソナタ第 9 番 ハ長調 Op.103(1947 年)

第 9 番は、プロコフィエフの最後のピアノソナタであり、彼の友人でありピアニストのスヴィアトスラフ・リヒテルに捧げられました。この作品は、他のソナタに比べて穏やかで、平和

的な雰囲気を持っています。複雑な技術的要素よりも、シンプルで抒情的なメロディが中心となっており、プロコフィエフの作曲スタイルの円熟期を感じさせます。

まとめ

プロコフィエフのピアノソナタは、彼の作曲家としての成長や時代背景を反映しており、初期の大胆でエネルギッシュな作品から、戦争による不安や内面的な葛藤を描いた「戦争ソナタ」、晩年の内省的な作品まで、非常に多様です。特に第6番から第8番までの「戦争ソナタ」は、その劇的な表現力と技術的な挑戦から、ピアニストにとって重要なレパートリーとして評価されています。

《風刺》Op.17: ユーモラスで皮肉な性格を持った小品集です。

プロコフィエフの《風刺 Op.17》(*Sarkasmes*)は、1912年から1914年にかけて作曲されたピアノ作品で、5つの楽章から成り立つ独自の小品集です。各楽章は、風刺的で皮肉な性格を持ち、当時のプロコフィエフの音楽的探求を反映しています。この作品は彼の独創的なリズム感、激しいダイナミズム、そして挑戦的な表現手法が顕著に現れており、プロコフィエフのモダンな作風を理解する上で重要な作品です。

《風刺 Op.17》は、プロコフィエフがロシア・アヴァンギャルドの影響を受け、伝統的な音楽形式や調性に挑戦した時期に作曲されました。彼のピアノ作品の中でも特に斬新で攻撃的な性格を持ち、リズムや和声の面で大胆な実験が行われています。タイトルの「風刺」は、この作品の皮肉な雰囲気を象徴しており、各楽章がそれぞれ異なる風刺的な内容や感情を表現しています。

この作品は、前衛的な技法を取り入れており、当時のロシア音楽界で物議を醸したと考えられますが、プロコフィエフ自身の個性と創造性を強く打ち出した作品でもあります。

《風刺 Op.17》は、以下の5つの楽章で構成されています。

1. 第1楽章: *Tempestoso*

- 激しい嵐のような性格を持ち、複雑なリズムと激しい音のぶつかり合いが特徴です。作品全体の導入として、力強いエネルギーが感じられます。

2. 第2楽章: *Allegro rubato*

- リズミカルで軽快な部分があり、時折ユーモラスな雰囲気も感じられます。風刺的なタイトルにふさわしく、皮肉を込めたような表現が強調されています。
- 3. 第3楽章: *Allegro precipitato*
 - スピード感と緊張感のある楽章です。プロコフィエフの作品にしばしば見られる、鋭いアクセントやリズムの不規則さがこの楽章にも現れています。
- 4. 第4楽章: *Smanioso*
 - 「狂氣的に」という意味のタイトルが示す通り、この楽章は非常に激しく、ほとんど狂氣的な性格を持っています。感情の爆発や内面的な葛藤が表現されています。
- 5. 第5楽章: *Presto possibile*
 - 最終楽章は非常に速いテンポで演奏されるべきもので、息をつかせぬ展開が続きます。この楽章も、全体を通して風刺的な性格が保たれ、最後まで緊張感を持ったまま終結します。

音楽的特徴

- **リズムの多様性:** プロコフィエフの特徴である、複雑で変拍子的なリズムが豊富に使われています。リズムの不規則性とアクセントの強調が、各楽章の風刺的な性格を引き立てています。
- **和声の斬新さ:** 調性に縛られない、時に不協和音のように聞こえる和声がいられ、プロコフィエフの実験的な作風がよく現れています。
- **ダイナミクスの対比:** 急激な強弱の対比や、テンポの変化が作品全体を通じて頻繁に現れ、聴衆を驚かせるような要素が取り入れられています。

影響と評価

《風刺 Op.17》は、プロコフィエフが当時の保守的な音楽観に対して挑戦的な姿勢を示した作品であり、彼の新しい音楽的言語を構築する上での重要な一歩です。現代音楽の先駆者としてのプロコフィエフの姿勢が、この作品に反映されています。

当時は賛否両論ありましたが、現在では彼の最も個性的で魅力的な作品の一つとして評価されています。演奏技術的にも非常に難しく、ピアニストに高い技巧を要求する作品です。

《トッカータ》Op.11

プロコフィエフのリズム感覚と技巧が発揮された作品で、ピアノテクニックの粋を極めています。

セルゲイ・プロコフィエフの《トッカータ Op.11》は、彼の初期のピアノ作品の一つであり、技術的に非常に難易度が高く、演奏者に対して卓越した技術力を要求する楽曲です。この作品は1曲のみの独立したピアノ作品で、典型的なトッカータの形式に則りながらも、プロコフィエフの斬新なリズム感や和声語法が強く反映されています。プロコフィエフのピアノ作品の中でも特に人気が高く、演奏会のレパートリーとしても頻繁に取り上げられています。

《トッカータ Op.11》は1912年から1916年の間に作曲されました。当時、プロコフィエフはサンクトペテルブルク音楽院に在学中で、ロシア音楽界の注目を集めつつありました。彼は既に独特の作風を確立しつつあり、この《トッカータ》にも、彼の斬新なリズムや大胆な和声が反映されています。

トッカータという形式は、バロック時代から続く伝統的な様式で、特に技術的に挑戦的な作品として知られています。プロコフィエフもこの伝統を受け継ぎながら、彼の個性的なスタイルを作品に取り入れました。

構成と特徴

《トッカータ Op.11》は、約4分から5分程度の短い曲ですが、その短い時間の中に極めて密度の高い音楽が詰め込まれています。主な特徴としては以下の要素が挙げられます。

1. **リズムの躍動感** この作品は、一定のリズムパターンが非常に強調されています。特に左手による低音域の反復音型が強い印象を与え、そこに右手が非常に速いパッセージを重ねる形で展開されます。この反復的なリズムが、トッカータの持つ「駆け抜ける」ような印象を強調しています。
2. **複雑な技術要求** 《トッカータ Op.11》は、演奏者に極めて高い技術を要求します。特に、指の独立性や持続的なエネルギー、細かいリズムの正確さが求められます。また、急速なテンポの中での音の明確さや、音の強弱を細かくコントロールする必要があります。
3. **大胆な和声語法** 和声の面でも、この作品は非常に独特です。調性感を保ちながらも、プロコフィエフらしい大胆な転調や不協和音が多用されており、20世紀初頭の前衛的な音楽の響きを強く感じさせます。このような和声語法は、後の彼の大規模な作品にも見られる特徴です。
4. **形式的な緊張感** このトッカータは、休みなく突き進むような印象を与える一方で、細かい部分では多くの対比が存在します。急速なパッセージの間に時折現れる、静かな部分が緊張感を高め、再び激しく音楽が進行する際により劇的な効果を生み出します。

《トッカータ Op.11》は、プロコフィエフのピアノ作品の中でも特に重要な位置を占めています。彼の初期作品に見られる前衛的なリズム感や独自の和声語法が明確に表れており、後の作品に通じるスタイルを既に確立している点が注目されます。また、この作品は20世紀のピアノ音楽においても重要な位置を占めており、リゲティやシュニトケなどの後の作曲家にも影響を与えました。

この作品を演奏するには、技術的な熟練度だけでなく、曲の持つ独特の緊張感やリズムの躍動感を表現する能力が求められます。プロコフィエフ自身がピアニストとしても優れていたため、彼の作品には演奏者としての視点が強く反映されています。特にテンポやダイナミクスのコントロールが重要であり、演奏者にとってはチャレンジングでありながらも、非常に達成感のある作品です。

《トッカータ Op.11》は、プロコフィエフの斬新なリズム感や和声語法が凝縮された作品であり、彼のピアノ音楽の中でも特に印象的な一曲です。20世紀のピアノ音楽における重要な作品として、今日でも多くのピアニストによって演奏され続けています。

《4つの小品》Op.4

抒情的で透明感のある初期のピアノ作品です。

バレエ音楽

プロコフィエフはバレエ音楽でも広く知られています。特に「ロメオとジュリエット」「シンデレラ」は、彼の代表作です。

- 《ロメオとジュリエット》Op.64:このバレエは、シェイクスピアの悲劇に基づいており、愛と死、対立のテーマが重層的に描かれています。
- 《シンデレラ》Op.87:シンデレラの物語を元にした明るく魅力的なバレエです。

映画音楽

プロコフィエフは、セルゲイ・エイゼンシュテインとの協力で映画音楽も手掛けました。

- 《アレクサンドル・ネフスキー》Op.78:エイゼンシュテイン監督の歴史映画のための音楽で、重厚なコーラスと管弦楽が融合した作品です。
- 《イワン雷帝》Op.116:同じくエイゼンシュテインとの共同作業による映画音楽です。

人間関係

プロコフィエフは、多くの著名な音楽家や作曲家と交友関係を持っていました。彼はリムスキー＝ニコルサコフやリャードフといったロシアの伝統的な作曲家から学びつつも、現代音楽に強い関心を持ち、セルゲイ・ラフマニノフやイーゴリ・ストラヴィンスキーとも関わりを持ちました。特にストラヴィンスキーとは、ライバル関係にあると同時に、お互いに尊敬し合う存在でした。

また、彼の2人目の妻であるミラ・メンデロヴィチとの結婚生活も彼の人生に大きな影響を与えましたが、彼女が反革命的とみなされ逮捕されるなど、プロコフィエフの晩年は政治的な圧力が強まる中で困難な時期でした。

思想と音楽観

プロコフィエフの音楽思想は、伝統的なクラシック音楽の形式を守りながらも、新しい響きやリズム、和声の探求に向かうものでした。彼は「新古典主義」と呼ばれるスタイルを追求し、形式の明確さと、斬新な音楽的要素を両立させようとしていました。

特に彼の「5つの音楽的顔」という概念が有名です。これは、彼の音楽スタイルを5つの要素に分けて説明したもので、抒情的、風刺的、モータリズム的、叙事詩的、壮大さを備えたものを指します。

彼の音楽はしばしば大胆で前衛的ですが、同時にメロディアスであり、聴衆にとってはわかりやすい部分も多く残されています。

セルゲイ・プロコフィエフ(1891年–1953年)は、20世紀ロシアの重要な作曲家であり、ピアニスト、指揮者でもありました。彼の作品は多様で、クラシック音楽の伝統を踏まえつつ、現代的な要素を取り入れ、革新的なスタイルを確立しました。プロコフィエフは交響曲、オペラ、バレエ、ピアノ作品、室内楽など、幅広いジャンルで活躍し、その音楽はしばしば鋭いリズム感と大胆な和声進行が特徴です。

1. 生涯

- **幼少期と教育:** プロコフィエフは1891年にロシア帝国のウクライナ地方、ソントフカ村で生まれました。彼は幼少期からピアノに親しみ、5歳で作曲を始め、9歳で最初のオペラを作曲しました。1904年、13歳でサンクトペテルブルク音楽院に入学し、作曲家リムスキー＝ニコルサコフやリャードフに学びました。彼は当初からその才能を発揮し、学生時代から革新的なピアノ作品で注目を集めました。
- **初期のキャリア:** プロコフィエフはロシア革命(1917年)の混乱を避け、1918年にアメリカに移住し、その後パリに拠点を移します。彼はこの時期にピアノ協奏曲やバレエ作品など多くの傑作を生み出し、国際的な成功を収めました。

- **ソビエトへの帰還:** 1936年にソビエト連邦に帰国し、その後は主にモスクワで活動しました。彼の帰国は、ソビエト政府の文化政策に影響を受けたものであり、彼の作品は次第にソビエトの思想に適合するよう求められました。しかし、プロコフィエフは依然として独自の作曲スタイルを守り続けました。
- **晩年:** 晩年は健康を害し、スターリン政権下での政治的な圧力や批判にも苦しみましたが、1940年代後半から1950年代にかけて、なおも多くの作品を生み出しました。1953年、スターリンの死と同じ日にモスクワで亡くなりました。

プロコフィエフは多様なジャンルで作品を残しており、その多くがクラシック音楽のレパートリーに残っています。

3. プロコフィエフの思想

プロコフィエフは音楽において革新と伝統のバランスを重んじました。彼はロシアの音楽遺産を大切にしつつ、同時に20世紀のモダンな音楽的言語を開拓しました。彼の音楽はしばしば、「大胆なリズム」「非和声的な和声進行」「メロディの鮮やかさ」といった特徴を持ちます。

- **形式と革新の融合:** プロコフィエフは、バロックや古典派の形式を尊重しながらも、それを現代的な響きや構造に変えることに長けていました。《古典交響曲》のような作品では、古典的な形式をユーモラスかつ斬新に再解釈しています。
- **「モダニズム」へのアプローチ:** 彼の音楽は20世紀初頭のモダニズム運動の中で進化し、シュニトケやショスタコーヴィチと並ぶソビエトのモダン作曲家として高く評価されました。とはいえ、彼のスタイルは過度に前衛的ではなく、聴衆にとっても比較的親しみやすいものでした。

4. 人間関係

- **ストラヴィンスキーとの関係:** プロコフィエフは同じロシア出身の作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキーと接触がありました。両者は一時的にパリで活動しており、互いに影響を与え合いましたが、ストラヴィンスキーが前衛的なスタイルを追求したのに対し、プロコフィエフはよりメロディックな音楽を重視するなど、スタイルには違いがありました。

- **ショスタコーヴィチとの関係:** プロコフィエフとドミートリイ・ショスタコーヴィチは、ソビエト連邦の二大作曲家としてしばしば比較されます。両者は同時代に活躍し、互いに尊敬し合っていましたが、ショスタコーヴィチの音楽はより政治的で社会的な内容を反映していたのに対し、プロコフィエフはより個人的で詩的な表現に焦点を当てていました。
- **ソビエト政権との関係:** プロコフィエフはソビエト連邦に帰国した後、政治的な圧力に直面しました。彼の音楽は一時期「形式主義的」と批判されましたが、それでも彼は政府の検閲を受けながらも多くの作品を残しました。彼の妻リーナ・プロコフィエヴァが政治的な理由で逮捕されるなど、家族も政治的に苦しむことがありました。